

父の戦争

私の父は一九四五年、当時十四歳でした。「悠久の大義のために殉ずることは日本男子としての本懐である」と特攻隊へ志願。海軍の真っ白い軍服と輝く七つボタンは父のあこがれでもあつた。予科練の試験に合格し出征が決ると、国民学校の校長先生が日の丸の旗に寄せ書きを作ってくれた。「不惜身命」「盡忠報国」などという勇ましい言葉と共に、友や村中の人々の名が寄せられてある。しかし、その年八月、戦争は敗戦終結し、父は飛び立つことはなかつた。もう少し戦争が長引けば「この旗を首に巻いて敵艦に突つ込めたな。」と、父は当時を振り返つた。

父は「戦争を美化するつもりはない。間違つていたと思う。」とも語る。家の向かいのお寺に朝鮮の人々が軍事徴用されて、三十人ぐらい本堂で寝起きしていたが、人間扱いされていなかつたことに触れ、「夜になると彼らの歌うアリランが聞こえてきた。聞いている方が覚えるほど毎晩のように歌が聞こえてきた。今思うと日本人はひどいことをしたなと思う。」

「しかしその時の自分は御國のため、陛下のため、命を捧げることがすべてで、他のことは目に入らなかつた。」と。

ここに生涯抜け出すことができないほどに一人の人生に食い込んだ宗教があつた。そしてこの国ではこの宗教と決別することができないどころか、かえつります。日本もその中がありました。

「私は何のために生まれてきたのか」
——人生の意味を求めて

人は人生に意味を感じられない生きるのが苦しく、無意味な人生は耐え難い。「人生とは何か」。これは、近代以降、強烈に人間に突きつけられてきた問いです。近代になつて人間は人間より上位の概念（絶対神や大自然など）のもとに許されて在るという在り方は出来なくなり、自らの意味を自らで見出します。そして、日清戦争戦死兵一万三千六百十九人、日露戦争戦死兵八万八千四百二十九人を靖国神社に合祀し、天皇の葬儀と並ぶ最も厳肅な儀礼として、天皇自ら参列する大祭を挙行するにいたつて、遺族をはじめ、マスコミも民衆もそして、真宗門徒もまた熱狂的に「御国の民」となつていきました。システムを作つたのは政府でしたが、それを推し進めたのは熱狂的な国民でした。

こうして、靖国神社は国民にとつて特別な位置を

てもう一度その方向に「日本人」であることの意味を見出そうとしている。靖国問題とはいつたい何であろうか。

父は「戦争を美化するつもりはない。間違つていたと思う。」とも語る。家の向かいのお寺に朝鮮の人々が軍事徴用されて、三十人ぐらい本堂で寝起きしていたが、人間扱いされていなかつたことに触れ、「夜になると彼らの歌うアリランが聞こえてきた。聞いている方が覚えるほど毎晩のように歌が聞こえてきた。今思うと日本人はひどいことをしたなと思う。」

「しかしその時の自分は御國のため、陛下のため、命を捧げることがすべてで、他のことは目に入らなかつた。」と。

ここに生涯抜け出すことができないほどに一人の人生に食い込んだ宗教があつた。そしてこの国ではこの宗教と決別することができないどころか、かえつります。日本もその中がありました。

「私は何のために生まれてきたのか」
——人生の意味を求めて

人は人生に意味を感じられない生きのが苦しく、無意味な人生は耐え難い。「人生とは何か」。これは、近代以降、強烈に人間に突きつけられてきた問いです。近代になつて人間は人間より上位の概念（絶対神や大自然など）のもとに許されて在るという在り方は出来なくなり、自らの意味を自らで見出します。そして、日清戦争戦死兵一万三千六百十九人、日露戦争戦死兵八万八千四百二十九人を靖国神社に合祀し、天皇の葬儀と並ぶ最も厳肅な儀礼として、天皇自ら参列する大祭を挙行するにいたつて、遺族をはじめ、マスコミも民衆もそして、真宗門徒もまた熱狂的に「御国の民」となつていきました。システムを作つたのは政府でしたが、それを推し進めたのは熱狂的な国民でした。

こうして、靖国神社は国民にとつて特別な位置を

「御国の民」——国家神道は擬似宗教

おくに

明治政府は列強に対抗できる強い中央集権的国家をつくるため、民衆に天皇皇室崇敬を中心とした「御国の民」としてのアイデンティティをもたせるためのシステムを作つていきました。一八八八年以降「君が代」が事実上の国歌となり、一八九〇年には「教

占めていきました。「靖国で会おう」を合言葉に兵士は死地に赴き、靖国神社の在り方は人生や死そして死後の領域にまでいい込んで来ることとなります。

「滅私」は、「私」の意味を求めることからは、逆説的ですが、思いはからいを滅却し、相対的な自己に

死ぬことによつて、そこに絶対的、宗教的と言える心境が開きます。実は、その「絶対」＝「大儀」に立つことで、かえつて非常に強力な主体が形成され、絶対的意味が獲得されたのです。「絶対」という言葉は、当時の思想界でも盛んに用いられ、京都学派の「絶対無」、大谷派の「絶対他力」など、いずれも多くの若者を戦地に赴かせる背景になりました。「信の回復」を唱えられた和田稠先生は、「国家神道は擬似宗教で

が集団的に働き、従わない者は非国民として、敵対するものは人間扱いをせず徹底的にいのちを踏みにじりました。現代では、効率性、機能性、経済性が重視され知的、身体的障害者、寝たきりの者等は存在意義のないものとして抹殺されつつあり、生まれる前からいのちが選別される状況も出現してきました。こうして、私たちは意味を求めて迷い、流転してきたのです。仏教とはこの「意味の世界」（生死流転）を離れるのですが、私たちは意味の世界を離れては生きられません。ここにアイデンティティの罠にかかるざるを得ない近代的自我の問題があります。

この問い合わせに向かい合わない限り、再び歴史が繰り返されることになります。ですから、靖国問題とは單

ある」と言わましたが、これがまさに擬似宗教の内容なのです。

「意味の世界」に流転する

人生を意味で支えようとすると、それがうまくいくほど、より生きがいを感じるのですが、意味づけしたその意味に、かえつて自らが奪われ、「意味」がもつていて強烈な魅力と裏腹に、「意味」がもつ閉鎖性、排他性が他のいのちを踏みにじることがあります。父が「日本男子」と言う時、万世一系の天皇を頂く悠久の歴史をもつた聖なる国の民であるという物語の中に、その意味を見出していました。それ

に一政治問題でも一宗教問題でもなく、私たちが何をもつて自らとしているのか、どこを世界（国）としているのか、他者とどう向かい合っているのかという人間存在の根本問題なのです。

監修・執筆 佐野明弘

一九五八年、静岡県生まれ。石川県加賀市蓮如上人御旧跡光闇坊住持。真宗大谷派教師、東本願寺同朋会館教導。アレン・ネルソン平和プロジェクト共同代表、放射能測定室こうせんぼう代表。

編集責任・お問い合わせ 真宗大谷派解放運動推進本部

〒600-8164 京都市下京区上柳町199

電話 075・371・9247

「私は何者なのか」——靖国神社問題に学ぶ——

真宗大谷派
東本願寺
niigashihOnganji
Shinshu Otani-ha